

大学と地域の連携による子育て支援の実践報告Ⅰ ～ 地域子育てサロンの取り組みから ～

The Coordination between a College and a Community for Improved Family Service I : A Project for Supporting Children and Families

(2011年3月31日受理)

上田 敏丈 榎尾真佐枝 福 知栄子
Harutomo Ueda Masae Makio Chieko Fuku

Key words : 子育てサロン, 地域, 大学, 連携

抄 録

本論は、本学子ども学部有志によって構成された任意団体が行った地域子育てサロンの実践報告である。地域子育てサロンは、月に1～2回開催の母親サロン、2ヶ月に1回開催の父親サロンであり、2009年4月から実施している。参加者は平均5～6家族であり、時間は10時から12時までである。さらに、2010年度は子育てサロン講座やサポーター育成講座を行った。これらの活動を通して、地域子育てサロンの参加者が主体的に企画運営することができるようになり、地域における主体的子育てサロンへのテイクオフを支援することができたが、サポーターやボランティアとの協働支援の課題が残った。

1. は じ め に

少子化が社会問題となり、子育てに対して社会の関心が高くなってきている。このような情勢のもと、「子育て支援」という用語を盛んに耳にするようになり、とりわけ保育所に対しては、これまでの入所していた幼児だけではなく、保育所のある地域社会全体の保育を担うことが要求されている。このような子育て支援という言葉が使われるようになった背景には「子育ての責任を家庭のみに押し付けるのではなく、社会全体で支えあう」という意味がある（前原, 2008）。

では、具体的に「子育て支援」とはどのような施策、対応を指すのだろうか。少子化への対応としてはじめて具体的な施策が示された「エンゼルプランブリード」（1994年）、「エンゼルプラン」（1995年）では、「子育て支援」とは主として保育所を拠点とした保育サービスの拡充を意味していた。その後、乳幼児と親への在宅育児支援が不足していることから、児童福祉法が2003年に改正され、

「子育て支援」事業が法定化された。そこでは、①地域子育て支援センターやつどいの広場などでの相談、情報提供、助言事業、②一時保育や幼稚園での預かり保育などの養育支援、③出産後の保健師の派遣などの在宅での養育支援の3つの事業を指している。

このような現在わが国の社会において、子育てを困難にする要因として武内（1993）は、子どもや母親自身の問題だけでなく、社会的・文化的状況が出現してきていると述べている。特に、核家族化に伴う、家族内の潜在的サポート力の低下や母親への育児負担の集中、子育てに役立つ知識や技術が伝承されないことがあげられる。このような社会的環境の変化に対して、育児中の母親が適応していくためには、母親個人の努力・成長と同時に社会的な子育て支援が不可欠である。例えば、ある地域での目標としては孤立しがちな母親たちに接触・交流の場を与えるための地域内交流に重点を置き、地域全体で子育てできるまちづくりを目指している。

地域には、様々な子ども・子育て支援活動の取り組み

がある。例えば、子育てサークルや子育てサロンもそうした活動のひとつである。子育てサークルとは、保育学辞典によると、こうした親たちが作ってきた子育てサークルが地域での子「子育て中の母親が集まって、日常生活の悩みや子育てに関する相談や情報交換などを行うグループ活動のこと。緊急時には子どもの預け合いなどを行うこともある。組織の出発点は、自発的に組織される場合や児童館や地域子育てセンターにおける地域活動を通して、組織される場合などがある。重要な機能として、子育て中の保護者の悩みや疑問などについて、当事者同士で話し合い解決していく場となっていることや地域の養育能力を高める資源としての働きもある。そのため、サークル活動に対する支援は活発化の方向にあり、市町村によってはサークル運営費の助成を行っている(森上・柏女, 2009)。」

また、子育てサロン活動は、地域を拠点に、子育ての当事者(子育て家庭の親子)など地域の住民が多様な活動を通じて、子育てを楽しみながら仲間を作り、お互いに支え合う活動を言う(全国社会福祉協議会, 2004)。このような子育てサークル・子育てサロンは、公民館や大学等、多くの施設で実施され始めている。しかしながら、それらの実践は実施されることそれ自体が目的となってしまうことも少なくない。だが、これらの実践にはむしろプログラムの評価を行うことが必要であろう。そこで、本報告では、本学において実施した子育てサロンの実践報告とその評価・反省を行い、地域で子どもの育ちを支援する活動としての地域子育てサロンの継続に寄与することを目的とする。

2. 地域子育てサロンについて

2-1. 発足の経緯

本学における地域子育てサロンは、子ども学部内の教師と知り合いの母親による縁から発足した。2008年夏ごろより、地域子育てサロンの重要性や特徴をつかみつつ具体的イメージを描いていき、2009年4月より実施するに至った。

集まる場所として本学の子育て支援室を利用し、母親と子どもが数組集まった。子ども学部の学生で関心のあ

るものが、ボランティアとして参加し、また、社会福祉協議会からの呼びかけに応じた地域のサポーターが参加することで、態勢が整ってきた。また、学内の施設を利用する、あるいは、相談や助言を行う役割として、筆者らも参加していった。

詳細な活動内容は、後述するが、2009年夏頃より、母親だけの子育てサロンの活動に加えて、子どもにとって重要な存在である父親によるサロン計画を練った。父親と子どもが大学の子育て支援室に集まり、一緒につこどもを遊んだり、父親同士が出会う場面を用意することになった。その時間帯は、母親は子どもと離れた時間を持ち、リフレッシュできる。同年10月から、父親サロンも活動を開始し、父親と子どもを対象とし、2ヶ月に1回程度の開催の割合で進めていった。

2-2. 母親サロンの活動内容

1) 活動の運営主旨

本サロンの特徴として、設立当初から計画していたのはサロン参加者の主体的な企画運営である。従来、子育て支援では事業主体者の講座やイベントといった取組が非常に多かった。それらは、もちろん一定の効果が認められるものの、子育ての主体となる父親・母親はいわば「お客さん」としての参加を余儀なくされ、日常の子育てとは異なる経験であるといえよう。

従って、本サロンでは、子育てを行っている親子に参加の呼びかけを行い、「場」として大学施設を提供するものの、その企画・運営の主体は参加者である父親・母親が中心となり、地域サポーターとの協働によって進めていくこととした。もちろん大学の人的資源として子ども支援力のある学生ボランティアや子どもの育ちや福祉に医療に関する専門的知識を有する教師らも支援メンバーとして参加した。地域福祉の推進役である社会福祉協議会職員の参加、さらに地域サポーターの支援により活動継続の支援態勢が徐々に構築されていった。

2) 活動の態勢

母親サロンの参加者は、中心となる母親とその友人達の親子で形成されていた。中心である数組の親子は、変わらず参加し、それぞれが口コミで広げていった親子が入れ替わり参加している状況である。

参加者は、平均5~6家族となっており、少ないとき

表1 子育てサロン記録 4月14日

時間	子ども	大人	サポーター・学生
10:00	自由遊び(ボール遊び, ままごと)	新玩具整理	一緒に遊ぶ・見守る
10:30	自己紹介	自己紹介	自己紹介
10:45	こいのぼり制作・自由遊び(玩具で遊ぶ, ままごと)	ミーティング(次回の活動についてなど)	制作の進行・ミーティング参加
11:30	片づけ	片づけ	片づけ
11:45	手遊び「こあら」	手遊び「こあら」	手遊び「こあら」
12:00	挨拶	挨拶	挨拶

は2～3家族、多いときで10家族程度であった。

また、大学近辺に在住で、子育てが一段落し、サロン地域の子どもの支援に関心のある女性がサポーターとして参加していた。学生のボランティア数名が子どもとの遊びなどの準備から活動さらには片づけなど一手に引き受けた。

回数及び時間は、2009年度が月に1回開催し、10時から12時までであり、2010年度が月に2回開催し、同じく10時から12時までである。

3) 活動例

以上のような態勢によって、子育てサロンを実施してきた。ここでどのように、サロンが開催されていくのかについての具体的事例を2つ紹介する。

事例1：2010年4月14日

表1は典型的な活動内容の代表として、4月14日の記録である。

朝、親子が子育て支援ルームに来るとまず挨拶をし、子どもたち一人ひとりに名札を付ける。子どもたちは各自好きな遊びをする(ままごと・玩具で遊ぶ・ボール遊びなど)。親は子どもの荷物を置き、母親同士で話をしたり、この日は新しい玩具が届いていたので、母親は玩具の確認をし、片付けをする。サポーター・学生は子どもたちと一緒に遊んだり、見守ったりする。親子が集まったところで一度片付けをして輪になり自己紹介をする。この時子どもの年齢を言う(写真1)。自己紹介が終わると、5月のこどもの日が近づいていたので学生主催の「こいのぼり作り」をする。こいのぼりは年齢が低い子どもでもできるようにこいのぼりの形に絵を描いたり折

り紙を貼ったりする制作となっている。出来上がった子どもは自由遊びをしたり、もう一つ作ったりする。

制作をしている間母親は次回の活動についてのミーティングを行う(写真2)。11:30になると親子で片付けをして、再び輪になり、帰る前の行事である手遊び「こあら」をし、あいさつをしてサロンが終了する(学生ボランティアの記録より)。



写真1：全体での自己紹介



写真2：ミーティング(手前)

事例2：2011年2月2日(水)

10:00頃より、母親と子どもが子育て支援室へ集まってくる。この日の参加者は、母親4名、子ども9名であった。子どもたちは慣れた様子で部屋のおもちゃを出し、遊びは始める。学生ボランティアが4名すでに部屋に入っており、本日の活動についての準備を済ませていた。

この日は2月ということもあり、節分にちなんだ活動

を行うよう前回のサロンで、母親と学生ボランティアで話し合い、決定していた。

10:30頃から、学生ボランティアが声をかけ、子どもを集め始める。新聞紙を丸めて節分の豆と見立てた。これは乳児が多い本サロンでも行えるようにした配慮でもあった(写真3)。

次に節分に関わる絵本を読み聞かせる。読み聞かせが終了した時間を見計らい、鬼に扮した男子学生ボランティアが部屋に入ってくる。子どもたちは母親、学生ボランティアとともに、「鬼は外」といいながら、丸まった新聞紙を鬼に投げつける。鬼は、しばらく逃げ回った後、室外へと退避した。

その後、節分豆を食べ、子どもは鬼のお面作りの制作を行い始める(写真4)。

その間、母親は次回のサロンの日程や内容についてのミーティングを始める。

11:45頃から、片付けが始まり、最後に全員で「さよならコアラ」の手遊びを行い、解散となった。



写真3：新聞紙での制作



写真4：鬼のお面の制作

2-3. 父親サロンの活動内容

1) 活動の運営主旨

父親サロンも、母親サロンと同じく子どもの育ちへの関心を持ち、子育てに主体的に取り組む意識を高めるために、2009年10月より実施した。忙しい仕事をもつ父親サロンは、無理をしないで継続できる活動を目指し、2ヶ月に1回の実施とすることにした。

2) 活動の態勢

活動の態勢は、仕母親サロンが平日午前に行っているのに対して、父親サロンは原則仕事が休める日曜日に実施した。活動内容についての話し合いは主に母親達と学生ボランティアによって行われていた。

3) 活動例

では、父親サロンの具体的事例をみていく。

事例3：2010年3月14日(日)

10時までに、子育て支援室に学生ボランティアが集まり、準備をしていた。この日は、学生によるエプロンシアターであった。参加者は、大人4名、子ども8名であり、全家庭が父親と子どもだけの参加である。

はじめに、全員が集まるまで子育て支援室で自由な活動を行った。この日は全員が顔見知りであったため、自己紹介は省略した。11時15分より、学生によるエプロンシアターが始まる(写真5)。その後、父親と子ども及び父親同士、子ども同士の交流を目的としたあいさつ遊びを行い、競争ゲームを行った(写真6)。

最後に、「さよならコアラ」の手遊びを行い解散となった。



写真5：エプロンシアター



写真 6：挨拶遊び



写真 8：調理室にて

2-4 地域交流会の試み

また、父親サロンと母親サロンの合同企画として、地域との交流が可能なもちつき大会を実施した。以下、事例である。

事例 4：2011年 3 月 13 日（日）

もちつき大会は、母親達のミーティングから、2010年 12 月からその発案が提案されていた。しかしながら、場所や方法、道具の問題で一時頓挫していたが、参加者それぞれの人的ネットワークを駆使して、場所の確保、道具の確保、もちつきの方法そして支援者らが確保できた。また、餅つき大会への参加を呼びかけるチラシを作成し、公民館に置いた。

3 月 13 日に地域の公民館を用い、学生ボランティアが託児を行っている間に（写真 7）、母親達が調理室で準備をし（写真 8）、父親達は杵と臼の設置を行っていた。ほとんどの大人が幼い頃の記憶を辿りながらの試行錯誤であったが、結果としては子どもも親も満足できる状態のもちつきを実施することができた（写真 9）。



写真 9：もちつき



写真 7：託児の様子

2-4. 地域における諸活動

さらに、本年度は、独立行政法人医療福祉機構の助成を受けて、以下のような活動を実施した。簡潔に記しておく。

1) 子育てサロン講座

目的

サロン参加者の母親が子どもの育ちについて、学ぶことで、子どもの育ちのニーズを適切に満たす子育てが可能になることを目的として、本学教師による講座を開催した。講座内容は、参加者の要望を受けて計画した。

実施

- ① 子育てサロン特別講座
発達障害ってどんな障害？
- ② 第01回子育てサロン講座
親子関係について

- ③ 第02回子育てサロン講座
幼稚園・保育所について
- ④ 第03回子育てサロン講座
幼児期の発達について
- ⑤ 第04回子育てサロン講座
学童期の発達について
- ⑥ 第05回子育てサロン講座
青年期以後の発達について
- ⑦ 第06回子育てサロン講座
カブラで遊ぼう
- ⑧ 第07回子育てサロン講座
発達と障害について

2) 地域子育てサロンサポーター育成事業

目的

地域において子育てサロンの活動を継続、発展させていくためには、「場」に主体的に参加し、運営や支援を行う地域住民のサポーターが不可欠である。そのために、本事業では、サロンサポーターとして必要な知識を学ぶことを目的として、講座を開催した。

実施

- ① 第01回サポーター育成講座
子育てサロンサポーターに求められるもの
- ② 第02回サポーター育成講座
岡山市の子育て支援状況について
- ③ 第03回サポーター育成講座
子どもと健康
- ④ 第04回サポーター育成講座
本学における取り組みの紹介とグループワーク

3. 考 察

本活動を行った結果、成果として以下の点にまとめられる。

- ① 子育てサロンの継続的な実施による子ども支援
母親サロンは月に2回、父親サロンは二ヶ月に1回と継続的に実施してきた。参加者の親の満足度は高く、本事業の助成金を使用して購入した遊具等により、子どもが安心して遊ぶ環境が構築できた。これらの環境を構成

することで、参加者の母親・父親の子どものニーズへの理解が深まり、自分たちで活動を考え、よりよい次の活動へとつながる主体性が導き出されてきたといえよう。さらに、地域交流会を参加者で企画立案し、実行できたことは、本事業の目的である主体的な意識・取組の萌芽として評価することができる。

- ② 子育てサロン講座による子どもの育ちへの関心の高まり

継続的な子育てサロンにより、参加者の主体性が高まり、子どもに関する知識の獲得欲求が高まった。そのために、本事業では、本学教師による子育てサロン講座を開催した。これらのことは、参加者の子ども理解が深まる機会となり、子どもにとってより適切な育ちの環境の構築に結び付くことが期待される。

- ③ 地域子育てサロンサポーター育成講座による効果

子育てサロンが地域に根付き、今後、継続していくためには、子育てサロンに参加するサポーターの存在が不可欠である。本事業では、サポーター育成講座を行い、地域でのサポーターとなりうる人材の育成を行った。本講座を経て、本事業で実施している子育てサロンを子どもが暮らす身近な地域で展開・継続していくことの可能性を参加者でディスカッションし、次年度以降の地域におけるサロン活動展開の可能性が見いだされた。

- ④ 地域を巻き込んだ父親・母親による活動の実施

2009年度より大学をベースとして実施してきたサロンであるが、2010年度後半になって、父親・母親によって餅つき大会が企画・実施されたことは、主体的に取り組むという視点は評価できる。今後は、地域におけるサロン活動のリーダーとなっていくことが重要になる。

しかしながら、本事業から次のような課題もみいだされた。

- ① 子どもを中心に置くことの難しさ

サロン活動に大人が活動に熱中してしまう傾向が見られた。子育て中の親たちがサロンで集まり、新たな人間関係が形成されることが望ましいが、大人の人間関係ができあがり、活動に対する熱意が高まるあまり、活動を

盛り込みすぎたり、長時間に及ぶことがあった。

本来の子どものペースにあった活動が展開できたかどうかについてのふりかえる機会が不十分であったといえよう。活動そのものが大切なのではなく、子どもが他の子どもたちや親以外の大人や若い学生や大学教師たちと一緒に時間を過ごし、地域の暮らしを経験する場としてのサロンの意味合いを再確認していくことが求められよう。

② 地域サポーターとの協働による運営

本取組では、遊びや製作を中心とする子ども支援活動では学生ボランティアが中心的な役割を担っていた。とりわけ、今年度に入り、月2回の活動となったことから、学生は準備に追われ、ボランティアへの負荷が高まったことが懸念として取り上げられる。

昨年度は、子育て経験や生活経験の豊かな地域住民のサポーターの存在があったが、今年度は、社会福祉協議会や地域サポーターとの連携が不十分であったことは否めない。子育てサロンの地域デビューへ向けて本取組では、育成講座を行ったが、実施時期が遅れたため、この講座を受講したサポーターとサロンの参加者がいかに協働して、活動を継続していくことができるのかについて次年度の課題として残された。

4. 終わりに

本実践報告では、中国学園大学子ども学部の教員有志により任意団体を設立し、地域子育てサロンを実施していくことを通して、地域貢献の試みを行ってきたことをまとめた。

地域子育てサロンの実施は、目的にも述べたとおり、参加者自らが地域住民と協働して企画・運営していくことへ方向付けることがねらいとして含まれていた。本実践を通して、継続的に地域子育てサロンを行っていく中で、徐々に参加者が主体的に実践していくことへと結びつけることができたといえよう。

しかし、そこには、ボランティアやサポーターとの連携をどのように構築していくのか、参加者自身の目的意識や活動の方向をどのように水路づけていくのが課題としてあげられる。

近年、大学には「地域に開かれた大学」「地域貢献する大学」という新しい役割が期待されている。しかし、そこで、単純に地域住民を呼び寄せるイベントや施設を開放するだけでは十分ではないだろう。地域に根ざして主体的に子育てを行っていく父親・母親及びその活動団体を育成していくことが本来の「地域貢献を行う大学」として考えられる。その意味においては、本学部の有志によって実施した地域子育てサロンは、一定の成果をみせたといえよう。つまり、子育てサロン参加者が提供された「場」から、主体的に活動する「場」を地域に広げていくという「テイクオフ」への支援を行えた。

このような一連の支援が「地域に根ざした大学」を掲げる本学における地域貢献の一つのあり方として提案できる。

引用文献

- 前原寛, 2008, 『子育て支援の危機—外注化の波を防げるか—』, 創成社.
 森上史朗・柏女霊峰, 2009, 『保育用語辞典 第5版』, ミネルヴァ書房, pp44～45.
 全国社会福祉協議会, 2004 『子育てサロン担い手養成ハンドブック』

補 足

本実践報告で述べた地域子育てサロンのうち、2009年度は岡山市の平成21年度いきいき事業の助成を、2010年度は独立行政法人医療福祉機構の助成金を受けて実施された。

謝 辞

地域子育てサロンを実施していくにあたって、勢力亭に活動し、記録も提供してくれた本学子ども学部のボランティアのみなさまに感謝致します。また、地域子育てサロンに参加し、欠かすことなく活動の記録をしていただいた参加者のみなさまに感謝致します。

